

にスポットを当てた着眼がよみとれる。そして、この二部が総論だ。ところで、このような「地域区分」の根底はなにか。ほかでもない、「変容」である。変容の激しいのは「周辺」であり、伝統が残され、しかも変容しつつあるのが「外縁」である。この「区分」によると、地域の性格は俄然はつきりしてくるのではないか。各論文の内容を読まなくても、目次をみただけでわかるように工夫されている。頭のいいゆえんであり、変容の本であるゆえんである。

一部、二部が総論だとすれば、三部以下は各論の形だが、もとよりこれは地誌ではない。当然のことながら、各論文は個々に脈絡なく書かれている。したがって、これをどう配列するかは、編集者の頭を悩ますところであるが、部を設定して、各部のなかの順序は、地誌でない以上、どちらでもよいという方式をとっている。見た目に仕上りはスマートにできている。こうして、編者は最後にまた、もうひとつ頭のいいところをみせた。

さらに、締めくくりがいい。B5判の大型で、三六二ページ、厚手の上質紙と品のいいクロス張りの表紙に金文字の題字を沈ませた豪華、ぜいたくな装幀は、気品と風格をもたせて、さすが。

発行 日本大学文理学部地理学教室、発売元 古今書院、B5判
8ポ2段組 三六二ページ、定価四五〇〇円。(山口恵一郎)

高重 進著 古代・中世の耕地と村落

本書は、著者が広島大学文学部に提出された学位論文であり、昭和二十九年の処女論文にはじまる既発表論文十二編に、未発表の近作二編を加えて構成されたものである。歴史地理学はもとより、歴

史学の分野にも大きな影響を及ぼして来た著者の主要論文が、新たに再編・体系化されて刊行された意義は大きく、歴史地理学に関心を有する者にとって、かねてより待望久しかった書である。

さて、本書は「古代の耕地と村落」と題された「前編」と、「中世の耕地と村落」と題された「後編」とから成っている。

第一章の「古代の耕地」においては、「畿内・中間地域」では畠・園地・宅地が分離されていたが、九州における園の検討から「辺境地域」では園地と宅地は分離していなかったと推定する。また、陸田・園地も「実体は畠」であったと結論し、田品が一坪単位に一括して付されていたことについても一節を割いている。

第二章では「条里地域における古代村落の成立とその変遷」がテーマとなり、「編戸↓里の成立↓条里による耕地の整備↓郷域の確定」というプロセスが推定される。ここでは「郷戸実体説」が支持され、その崩壊と郷里制成立との対応が想定される。さらに讃岐国多度郡に関して郷域の復原も試みられ、論を進めて五〇戸(郷戸)と田一九五町、宅地一〇町、園地四五町から成る里(郷)の規模が推定されている。

第三章は、「初期荘園村落」と題された「讃岐国山田郡弘福寺領田」と「阿波国東大寺領新島庄」の現地比定を中心に据えた事例研究である。

第四章「中世の耕地」では畠の「存在形態」が検討され、戸田芳実説批判の形で展開された「かたあらし」||「二圃制」否定論が収められている。さらに、灌漑をめぐる「普通寺領田」あるいは満濃池の研究から、溜池築造の目的が灌漑条件の改善にあったことなど

従来の究明が不充分であったことにも論及している。

第五章、「中世における村の成立と村落」においては、「伊予国弓削島・備中国服部郷・備後国大田庄・安芸国三田郷・薩摩国鳥丸村・大隅国平松村」などの事例によって、「古代村落の郷から近世村に至る過程」の解明がもくろまれていた。鳥嶼の「弓削島」では、「郷戸制下」の有力郷戸が全郷域に散在する名田を所有する「過大名」に成長し、その存在が「近世村」形成への動きを遅らせたと結論する。平野部の「服部郷」でも、名・土豪の土地所有や動向に注視しつつその「構造」を検討し、この郷をも古代からひきつがれ「中世にも生きている」「遺制郷」の典型としている。さらに、「大田庄」では条里呼称・村落呼称などを検討し、「一次郷」の下の「村」が「二次郷」に、さらにそれが「近世村」へと変容すること、その過程が「過大名」の崩壊と「中規模名」の抬頭とからまることを推定する。このパターンは図式化されて明確に打ち出され、「三田郷」は小規模な多数の村に分れた例として位置付けられている。

このように展開された①古代と中世の②耕地と村落、あるいは③その変遷をめぐる本書の価値は、④古代郷から近世村への「分裂縮小化」という視点、⑤畠の分析や二圃制の存在否定論、⑥弘福寺領田図の現地比定をはじめとする多くの事例研究、などが既に広く受け入れられていることから明白である。また「序説」と「結語」によって目的と視点、主要論点が整理・要約されており、各節毎にも類似の整理がされているといったように、本書のすぐれた内容と構成は枚挙にいとまがない程である。

ところが同時に、評者にとって不親切に感じる点が多かったこと

もまた事実である。例えば、論文集の構成のためかとも思えるが、「過大名」、「一・二次郷」などの著者の用語が必ずしも初出の部分で定義・説明がなかったり、「葛野郡班田図」など同一史料についての年代評価などの記述が、引用のたびに少しずつ異なっていたりする。タイトル・本文・図表に誤植が見えることも実におしまれる点である。さらに、論証が必ずしも完璧でない点や荒削りの部分も目につくが、これらは、ひとり著者のみにとどまらず、後に続く者もまた、原論文発表時以後の成果をもふまえて研究対象とすべきことがらかも知れない。

しかし、本書がすぐれた学術書であることは動くものではなく、その大きな特徴は「耕地や村落を制度および社会経済的背景において解明しようとした」とする著者の姿勢にある。⑦常に歴史的視点と地理的視点の結合、制度との関連が意識されていること、⑧郷と村の背景に郷戸と房戸、「過大名」と「中規模名」が考えられ、さらに「畿内・中間地域」と「辺境地域」が対置されていること、⑨制度あるいは推定結果からの演繹と、事例から制度への帰納あるいは一般化とが複雑に織りなしたダイナミックな論述であることなど、読者にとって極めて魅力ある本であり、歴史地理学における大きな成果である。

昭和五〇年三月三十一日 大明堂刊 A5版 三二七頁 六四〇〇円

(金 田 章 裕)